

陣馬街道と陣馬山

陣馬街道は、甲州街道の追分交差点から和田峠を経て、神奈川県相模原市緑区の藤野地域までを結ぶ街道です。ここでは陣馬街道にまつわる逸話を取り上げつつ、恩方地域の歴史も掘り下げてみます。

陣馬街道とは？

陣馬街道は、街道沿いにある地域名から「恩方街道」「佐野川往還」「案下道」、また甲州街道と別に甲斐国に向かうルートとして利用されていたことから、「甲州脇往還」「甲州裏街道」など、多くの別称があります。古くから武蔵と甲斐をつなぎ、甲州や恩方などの山の産物を江戸へ運ぶための重要な交易路でもありました。そのため江戸時代には、上恩方町の高留に

出入りを取り締まる口留番所が置かれていました。都の通称道路名として「陣馬街道」という呼称が使用されるようになったのは1963（昭和38）年のことです。

街道の起点となるのは、甲州街道の追分交差点。脇に建つ江戸時代の道標には「右あんげ道」と刻まれています。南浅川を越え、元八王子地域を経て、切り通しを境に恩方地域に入ります。

かつてはのどかな農村地帯でしたが、1969年に繊維工業団地が完成し、陵北大橋が竣工した後の1973年に宝生寺団地の入居がスタート。1983年には小田野トンネルが開通するなど、街道沿いは少しずつ発展し、チェーン店なども出店して賑やかになっていきました。

恩方の地域文化

宝生寺や観栖寺、宮尾神社には、童謡「夕焼小焼」にまつわる碑が建っています。毎日夕方のチャイムで流れ、八王子市民の誰もが口ずさめるこの曲は、上恩方出身の中村雨紅（本名・高井宮吉）が1923（大正12）年に作詞しました。日暮里で教員時代を送っていた中村は、児童の情操教育のため、童話・童謡の執筆に励んでいました。この曲は故郷への帰り道の情景を詩にしたものといわれています。

また、恩方地域では大正時代から地元青年たちによる地域研究が活発に行われました。特に恩方村青年団は農村文化の振興に邁進し、「緑土」という団報を発行するなどして積極的に外部へ発信を続けました。彼らの活動に関心を寄せ、折口信夫や中村星湖、小



▲宮尾神社の「夕焼小焼」碑



▲宝生寺の「夕焼小焼」碑



▲中村雨紅の墓



▲宝生寺の「夕焼小焼の鐘」碑

中村雨紅の碑あれこれ

田内通敏、今和次郎の他、多くの文人や研究者が恩方地域を訪れています。戦後に至っても、地域の研究は積極的に進められ、恩方の文化を紹介した書籍が数々と発行されました。彼らがこゝした交流のために往来していたのが、陣馬街道だったのです。

▶追分道標



陣馬山

陣馬街道の中間地点、神奈川県との境には、八王子市内で2番目に高い山、陣馬山がそびえています。一説には、戦国時代に北条氏が甲斐の武田氏と対陣していたことから「陣張山」と呼ばれるようになり、後に「陣場山」と名付けられたと伝えられています。

1956年、「陣場観光協会」が設立され、高尾と並ぶ観光地化を目指していきま

す。その中心にいたのが京王帝都電鉄で、観光客へのイメージアップを図るため、陣場山から景信山周辺を「陣馬高原」と名付けます。山頂には富士山に向かっていなく「白馬の像」（表紙写真）が建てられ、「陣馬山」という名



▶バス停「陣馬高原下」そばの登山口



▲新ハイキングコースへの入口



▶山頂の碑

称が定着していきました。

陣馬山は「関東の富士見100景」に選ばれた関東屈指の好展望の山で、山頂からは360度の大パノラマが楽しめます。高尾駅から「陣馬高原下」行きバスで終点下車（約40分）し、山頂までは徒歩約90分。藤野駅や高尾山からの登山コースもあり、登山初心者でも登ることのできる行楽向きの山として、季節を問わず多くのハイカーで賑わっています。

ひと休み コラム 桑の実ファーム

陣馬街道沿いの松竹橋^{まつたけ}を渡って西へしばらく進んだ圏央道にさしかかる辺りに、500坪の土地を擁する「桑の実ファーム」があります。ここは、諏訪町にある桑の実幼稚園が2017（平成29）年から、無農薬で安心・安全な野菜を育てるために整備してきた農園です。ここで日々、畑の世話をしている

のは、もともと恩方地域で無農薬農法に取り組んできた木村正男さんをはじめ、6名のボランティアの方々です。特に当番などは設けず、メンバーは各々時間があるときにファームへ出向き、畑の手入れをしています。また、駐車場や物置、休憩所など、徐々に周辺の整備も進めてきました。

桑の実幼稚園の園児たちは、昨年度から年間を通して、時期を迎えたときに野菜の種まきや収穫体験に出向いています。

収穫した野菜は園の給食でも使われるほか、園児たちが持ち帰っています。園児たちは野菜だけでなく、土の中にいる虫や周囲の花々にも興味津々。ふだ



▶園児たちのジャガイモ収穫

ん体験できない農作業を思い思いに楽しみながら、自分たちで育てた野菜を食べる、まさに「食育」の体験をしています。

現在育てているのは、トマト、キュウリ、ジャガイモ、キクイモ、パプリカ、カボチャ、スイカ、ヘビウリ（「はちとび」31号参照）など。日本ではあまり見られない赤いヒマワリといった珍しい花々も植えられています。桑の実ファーム全体を管理している

木村さんは、これからさらにブルーベリー、パッションフルーツなどの果物や、里芋、こんにゃく芋など、次から次へと新しい野菜の栽培に取り組みたいと抱負を語ります。

ただ、恩方地域では、イノシシなどの野獣の農業被害が深刻な課題となっています。桑の実ファームでもさまざまな対策を立てているものの、昨年はフェンスを破られ、サツマイモが一晩で全滅してしまったこともあったそうです。生き物相手ゆえ、なかなか予定通りにならないところもありますが、大人たちは子どもたちに少しでも喜んでもらおうと、工夫を凝らしながら奮闘しています。



▶桑の実ファームに携わる先生方（左端が木村さん）

*問い合わせ：65111943（桑の実幼稚園）